

生徒が巣立つ新しい時代を見据えて、斬新な教育プログラムを実践している海城中学校・高等学校。昨年4月には「グローバル教育部」が発足し、これまでの教育をさらに進化させた教育システムが構築されつつある。同校の中田大成教頭と、安田教育研究所の安田理代表が、そうした教育の魅力と今後の方向性について語り合った。

「共生教育」の強化をめざして「帰国生入試」を導入

安田 海城学園では、次の時代を見据えて、さまざまな取り組みを進めています。2011年度からは中学校で「帰国生入試」(募集人員30名)を導入しました。その狙いはどこにあるのでしょうか。

中田 それ以前は、高校で85名を受け入れていました。中学校段階で異なる体験を得た生徒同士がお互いの違いを認め合いながら学校生活をおくることは、人間形成の上で大きな意義があると考えていたからです。そのため、高校1年から両者を混在させたクラスを編成し、「一緒に授業を受ける形」にしました。ところが、近年、高校からの入学者の「異質性」があまり感じられなくなってきたのです。そこで、2011年度から、高校募集を停止するとともに、それに代わる異質な体験を有する生徒を受け入れるために、中学校で「帰国生入試」を導入しました。小学校時代を海外で過ごした子どもたちが入学してくることで、校内の多

様性、すなわちダイバーシティを高めて、新しい時代を生きていく子どもたちに必要な「共生力」が養われることを期待しています。それがグローバル社会に対応できる力につながるかと考えています。

安田 海城学園は以前から「共生教育」に力をつけていますね。

中田 ええ。約10年前から、10名程度の生徒でクラブを編成し、与えられた課題を協力しながら解決するアクティビティ「プロジェクトアドベンチャー」を取り入れています。また、大人の体験を書き出し、それに基づいて班員全員でシナリオを書いて演じたりする「ドラマエデュケーション」も行っています。いずれの授業も、グループの他のメンバーの異質性を尊重しつつ、共生、協働することの大切さを体得することを目的としています。「帰国生入試」導入の目的には、そうした教育をさらに強化するという側面もあるのです。

安田 実際に、帰国生が数多く入学してきたことにより、「共生教育」がさらに進化した面はあるのでしょうか。

中田 帰国生を特別扱わず、8クラスに均等に振り分けて、英語も含めて同一の授業を実施しています。帰国生は国際感覚に優れ、表現力も豊かであり、とくに体験型の授業は大幅に活性化しています。しかも、本校には、すでに帰国生の突出した個性を伸ばすことなく、むしろ良さを引き出して、協力して作業を進めようとする土壌が出来上がっています。これまでの「共生教育」の成果だと感じています。また、帰国生の中からはすでに中学校で生徒会長を務めた生徒も出ています。彼の英語を交えた見事なスピーチを聞いて、「自分もあんなスピーチが披露できるようなりたい」というあこがれの気持ちも生徒たちの間に芽生え、それが英語学習のモチベーションにもつながっています。

安田 英語も、縮のクラスでの授業だと、帰国生にとっては物足りない内容になる可能性はありませんか。

中田 本校では、中1の1学期終了時点から、(放課後)講習がスタートします。その中に、英語指導員が指導致行する特別講習を設けており、そこで英語力の増強を図る形にしています。また、帰国生の中には英語が得意な反面、国語や

次代のグローバル人材の育成をめざしてさらなる進化を図る

の希望者が増加してきたことから、同様の機会の拡充を検討中です。高2までは、海外の大学進学を視野に入れた生徒が増えつつあるため、「グローバル教育部」で早い時点で進学カウンセリングを行うとともに、TOEFL、IELTS、SAT、エッセイなどの試験対策や、出願書類作成の支援などのバックアップ体制を整えています。

安田 この数年、社内の公用語を英語にしたり、海外の大学卒業生の採用枠を増やしたりといった企業の動きが見られます。それを受けて、保護者が国内の難関大学信仰から脱却して、海外の大学に目を向けるようになっていくのが期待されます。

中田 そう思います。先日、海外の大学進学に関する講演会を実施したところ、中学を中心にして200名弱の親子が参加しました。急激に関心が高まっていると感じています。先日、世界

の有力大学が採用する大学受験資格「国際バカロレア(I B)」取得のための教育課程に、2015年度から日本語授業の導入が決定したことが公表されました。そうした新しい動きに関しても積極的に情報を収集して、適切

に配慮し、社会に貢献する意思を持った生徒こそが、本校がめざす生徒像です。

安田 それこそが本物のグローバル人材です。自分だけが恵まれてはいけなくて、恵まれているだけでは、優勝劣敗の社会を招くだけです。恵まれていない人に優しい目を向け、一緒に生きていく社会を築ける人材を育ててほしいですね。その意味では、放課後の講習「融合講座」は、まさにリベラルアーツを培う場になっていると思います。

中田 「融合講座」としては、英語と理科あるいは数学と理科の融合講座などを実施したりしています。そのほか、古典から近代の日本文学に触れる国語のリレー講座、夏休みの数学のリレー講座なども開講しています。いずれも正規の授業では扱わない、少し高度な内容であり、学問としての教科の面白さを感じる場になっています。

安田 身近な教員が、自らの専門分野に関する造詣の深さを見せ、なぜその学問を志したのか、そうした思いを伝えることで、生徒たちの心が揺さぶられ、知的関心を引き出す効果が期待できます。

中田 本校では、あえてシラバスは作成していません。大きなカリキュラムの枠組みは作りませんが、具体的な授業内容は教員の裁量に任せます。もちろん、その裏付けとして、一定水準の授業内容が担保されることが必要になります。そこで、授業風景をビデオに撮って、学年単位などで全教員が見ながら、よりよい授業のあり方を議論する「授業カンファレンス」なども実施しています。他の教員の授業の「見える化」によって、自らの授業を見直すことを促してもいいと思います。

安田 なるほど。先生同士が協力して、授業改善に努めているんですね。そうした土壌があるからこそ、新しい教育の試みも柔軟に取り入れることができるわけで、それが海城学園の大きな強みになっていると思います。



▲科目ごとの壁を越えて行われる「英語・理科融合講座」の様子



▲プロジェクトアドベンチャーでは、集団で物事に取り組んでいく方法や態度などを学ぶ

多様な経歴の教員による「授業カンファレンス」

安田 「融合講座」が充実した内容になっているのは、多様な経歴の教員を積極的に採用していることも関係していると思います。南極越冬隊員経験者の地学教員もいらっしゃるそうですね。

中田 本校では、生徒の実感を大切にする「体験学習」を重視しています。先ほど申し上げた「プロジェクトアドベンチャー」「ドラマエデュケーション」もその一例です。また、理科では、いきなり原理原則、公式から入るのではなく、実験・観察・巡検など、具体的なものに触れるところからスタートし、身体で何かを感じ取った上で考えさせる授業を展開しています。社会でも、約20年前から、フィールドワークや取材をもとに、レポートにまとめる総合学習を導入しています。多様な経歴を有する教員の存在が、そうした体験学習をよりパラダイムに富んだもの

にする上で役立つと感じています。

安田 近年、各校でシラバスの導入が進行し、授業が標準化している面があります。海城はむしろ教員の個性・資質を大切にしているわけですね。

中田 本校ではあえてシラバスは作成していません。大きなカリキュラムの枠組みは作りませんが、具体的な授業内容は教員の裁量に任せます。もちろん、その裏付けとして、一定水準の授業内容が担保されることが必要になります。そこで、授業風景をビデオに撮って、学年単位などで全教員が見ながら、よりよい授業のあり方を議論する「授業カンファレンス」なども実施しています。他の教員の授業の「見える化」によって、自らの授業を見直すことを促してもいいと思います。

安田 なるほど。先生同士が協力して、授業改善に努めているんですね。そうした土壌があるからこそ、新しい教育の試みも柔軟に取り入れることができるわけで、それが海城学園の大きな強みになっていると思います。

中田 本校ではあえてシラバスは作成していません。大きなカリキュラムの枠組みは作りませんが、具体的な授業内容は教員の裁量に任せます。もちろん、その裏付けとして、一定水準の授業内容が担保されることが必要になります。そこで、授業風景をビデオに撮って、学年単位などで全教員が見ながら、よりよい授業のあり方を議論する「授業カンファレンス」なども実施しています。他の教員の授業の「見える化」によって、自らの授業を見直すことを促してもいいと思います。

安田 なるほど。先生同士が協力して、授業改善に努めているんですね。そうした土壌があるからこそ、新しい教育の試みも柔軟に取り入れることができるわけで、それが海城学園の大きな強みになっていると思います。

中田 本校ではあえてシラバスは作成していません。大きなカリキュラムの枠組みは作りませんが、具体的な授業内容は教員の裁量に任せます。もちろん、その裏付けとして、一定水準の授業内容が担保されることが必要になります。そこで、授業風景をビデオに撮って、学年単位などで全教員が見ながら、よりよい授業のあり方を議論する「授業カンファレンス」なども実施しています。他の教員の授業の「見える化」によって、自らの授業を見直すことを促してもいいと思います。

安田 なるほど。先生同士が協力して、授業改善に努めているんですね。そうした土壌があるからこそ、新しい教育の試みも柔軟に取り入れることができるわけで、それが海城学園の大きな強みになっていると思います。



安田教育研究所 やすだ おさむ 安田 理 代表 東京都出身。早稲田大学卒業後、読書研究社入社。雑誌の編集長を務めた後、受験情報誌・教育書籍の企画・編集にあたる。教育情報プロジェクトなどを主宰、幅広く教育に関する調査・分析を行う。教育情報編集部長を最後に同社を退職。2002年、安田教育研究所を設立。講演・執筆・情報発信、セミナーの開催、コンサルタントなど幅広く活躍中。

海城中学校 高等学校 なかた たいせい 中田 大成 教頭 1960年生まれ。早稲田大学第一文学部日本文学科卒。早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得修了。「(学校)改革元年」の1992年より、海城中学校・高等学校で国語を教える。2003年より2008年まで校内の企画立案機関「将来構想検討委員会」の委員長として、第二期の学校改革を主導。2011年4月より教頭に就任。